

承継

Project

だましてだまされてSPC、最高の人生!!

File.02

東北統括青森本部

増山 真弥
増山 幸子

前回から始まった『承継プロジェクト』第2弾は、現・東北統括本部会長を務める増山氏を取材させて頂いた。彼もまた、母がSPCに入会し、二世会員としてSPCと共に人生を歩んで来た人物である。そこにはどんなドラマがあったのか、ご紹介させて頂こう。

SPCとの出逢い

増山幸子さんは青森の十和田にて、女手ひとつで理容室を営んでいた。旦那様は別の仕事をしており、子供は長男・真弥さんと長女・彩文千(さやか)さんのお2人。幸子さんの理容室の従業員は美人揃いで、十和田イチの繁盛店だったが、41歳の時、持病の喘息の悪化で店を閉鎖するか考えていた。

そんな時にSPC東北の拡大があり、声をかけて貰ったのがきっかけで、岩手県で行われた東北押野室員のセミナーに参加した。そのセミナーの中で、

「普通の会社を創れる」という押野氏の言葉に魅力を感じ、SPCに入会を決意。

住み込みで働いていた休業時代は、雇用保険も無くお小遣い程度の給料で、食事の支度からおまるの掃除までさせられて来た。公務員の親友が8時間労働やボーナス、夏休みには旅行をして青春を謳歌している話を聞いては、『普通の会社』というものに強い憧れを抱いていたのである。

組織の先輩から『美容は簡単、顔そりを取っただけだよ!』と美容展開を勧められた。家族に相談した所、当時中学生だった真弥さんからは

「母ちゃん、もう40過ぎだよ!」

と反対されたが、幸子さんはこれまでの理容室を美容室に転換。

しかし、自分に美容の技術がない事もあり、雇った美容師に少しでも注意しようものなら、すぐに辞めて出て行ってしまい、働き手がおらず、結局店は閉店する事になってしまったのであった。

全部ひっくるめて、「承継」

10年越しの挑戦

店を閉めた幸子さんであったが、『ここで立ち止まってはダメだ！』と、SPCの組織活動は辞めなかった。仙台での定例会議や東京での全国大会への参加は交通費もかさみ、夜行バスを使つての移動は体力的にも大変だったが、自宅には家族経営から文化人までの『SPCブランドデザイン』を壁に張り、組織で学び続けた。

そして10年の時を経て、美容室を新規出店。これまで培った知識をフル稼働して、回転数を考えた駐車場の確保をし、公庫や助成金を使い、社員50名を持つまで一気に駆け上がったのである。

跡継ぎづくり

幸子さんは組織の先輩に、子供をこの道に入れるコツを教えて貰った。まずは物で釣つて、高校に通うと同時に通信で美容師免許を取得させたそうだ。

「テレビを買ってくれる、と言つたから。でも、始めてみたら面白くなつて」と真弥さんは語る。

幸子さんの誘導にまんまと引つかつた真弥さんは、横浜のサロンで2〜3年ほど修行し、幸子さんの店に戻つて来た。また、真弥さんと年子の彩文千さんも、幸子さんが意図せず、母と兄の背中を追つて美容の道に進んだ。彩文千さんも高校に行きながら通信で美容師免許を取り、卒業後はすぐに母の店を手伝つた。

「息子には、まんまと引つかつてシメシメ、という所ですが、娘もどういふわけかこの道を選んできて。2人には本当に感謝です」幸子さんは笑顔で語つた。

ピンチがチャンス、親子の転機

6年前、幸子さんの体は悪性リンパ腫に侵された。つまり、ガンである。発覚した時には

人とも意見が合う事はまず無く、どんなシーンでも3人は、母と娘対息子、母対息子と娘母と息子対娘…というように、2対1で議論が絶えず、3人でバランスを取つて来たそうだ。

「現象に振り回されると、子供に対して不満が覆い被さる現実があります。子供は槍を持つて向かつているし、私は鉄砲を持っているので、潰してしまふ。これは何度も体験して言える事です。しかし今は、息子と娘のありのままを受け入れる事が出来るようになりました。子供への情は先天的に持っているものですが、理性は学んで身に付くものだと思つたのです。親子間の深い情を理想的に考える観点を身に付ける事が、親の役目のような気がします。子供と自社の向かうべき具象

4期プラス2、1年半の抗がん剤治療…これがまさに承継の転機となった。

「抗がん剤の副作用で髪が抜け落ちた母の頭を丸坊主に刈つた時は、さすがに泣きましたね」

と真弥さん。この時から、『自分がしっかりしなければ！』と、彼の中の意識が変わつて行つたそうだ。

真弥さんと彩文千さんは母の入院中、店を守る事に専念した。兄妹の団結は、幸子さんが不在中、過去最高利益を打ち出したのである。

そして幸子さんは、横山創設理事長の『天意を抱いて生きる』を実践した。24時間自然（宇宙）のエネルギーを自分の生命の中に取り入れ、奇跡的に回復し、その後は仕事にも復帰できたのである。

SPCでは二世会員として組織活動をして来た真弥さんは『自分も早く社長になりたい』という思いがあった。母の復帰後は3年かけて社長交代を説得し、やつとの事で幸子さんを会長にしたそうだ。

さらに、年の近い兄妹はどちらも自立心が強く、お互いがどちらも主役としてしっかり伸びていけるよう、幸子さんは会社をもうひとつ作つた。こうして真弥さんと彩文千さんは、どちらも社長になったのである。

「引き継ぐのは、会社だけではありません。母の生き方や、SPCの事や、地域の事、本当にいろいろ…。全部をひっくるめて、『承継』。真弥さんは様々な想いを噛み締めながら、こう語つた。

「親子の情」と「経営思想」の狭間で

「学生の頃からですが、家庭でも親子らしい会話が全く無いのがイヤでした。コミュニケーションはとるけれど、仕事の話ばかり。店でのやり方で喧嘩ばかりしていました」過去を振り返つた真弥さんの言葉に、彩文千さんも頷く。

親子での経営において、これまで3人が3

抽象を共有すれば、共に並び見ている方向が同じになるのです」

と、幸子さんは語る。まさに横山創設理事長の提唱する『三心三象三哲学』が、彼らの承継に活かされていた。



親のスネをかじった分、 大きくなればいい。

受け継ぐのは、まず『想い』

これまで、まるで母の手のひらで転がされて来たような真弥さんだが、『承継』について、こう語る。

「私達のように親子で承継する企業は多いと思いますが、なかなか上手く行かない理由としては、親を説得する為の裏付けをしたり根回しをする前に、子供の心が折れてしまふ事が多いのでは、と思います。そこは忍耐強く、頑張らないと。あと、二世は親のスネをかじってもいいんですよ！かじりっぱなしはダメだけど！かじった分、大きくなればいい」

母が挑戦した美容経営は、2人の兄妹の力も加わって、現在では13店舗、社員150名という大企業に成長した。また、真弥さんは現・東北統括本部長として組織でも躍進している。

「会長になったのは、東北の人材不足という事もあるけれど、とある方から『会長と副理事長、理事長、何になりたい？』と聞かれた事があって、どれかと聞かれたら、身内である東北をまとめる会長になりたいと思えました。会長になるからには、まずは自分が自社の代表になってから！と。また、会長を目指して、やっと組織の為に動くという意識が芽生えて来ました。そして会長をした後に自分がどうなっていきたいかも考えるようになりました」

きっかけは人から貰う事の多い真弥さんだが、たくさん仲間との出逢いと、仲間から受けるひとつひとつの言葉や学びを活かし、前進し続けている。

自社も組織もしっかりとバトンタッチした幸子さんは、最後に息子に向けて、こんな言葉を残した。

「今、私は映画でお馴染みの『八甲田山』の山麗で春から秋までを過ごしています。映画『八甲田山』は、ロシアとの戦争に備えて雪中訓練を描いたノンフィクション映画です。2つの連帯が同じ自然の条件下で、方や全員無事に辿り着き、方や200余名の命を落とします。リーダーとしての決断の在り方や現場での対応など、学ぶことの多いお話です。部下の人生を背負っている事の大事さを実感できると思います。生産性の限られた業種で、国の政策は厳しくなり困難な状況ではあると思いますが、自己の価値観や倫理観（正しさ）に依存せず、意識を常に透明にしておいて、見える現実を、見えない価値観と本物の目的をもって瞬時に対応できるようになり、大雪の中、全員を導いた隊長のような存在になって欲しいと願います」

真弥さんはこんな母の想いをしっかりと胸に受け止め、次世代を担う素晴らしいリーダーとなるだろう。

(有)アーティスト

青森県十和田市東三番町7-15 TEL 0178-22-7740
代表取締役社長 増山 真弥 / 取締役会長 増山 幸子

(株)レセプター

青森県青森市浜田字玉川196-10
TEL 017-752-0248
代表取締役社長 増山 彩文千
取締役会長 増山 幸子

<http://artistar.biz>

